

## 再考：ポストインペリアル台湾と白団（1945-1952）

この報告は、戦後の台湾に焦点を当て、大日本帝国の遺産、つまり占領下の皇民化動員体制の経験が、第2次世界大戦後に国民党政権に「領土返還」された後も台湾の人々の間で集合的な記憶として留まり続けたことについて論じる。

日本語の「こうふく」が「光復」（領土返還）を意味するのか「降伏」を意味するのか、戦後の台湾人は非常に混乱した。それは、1947年2月28日の二・二八事件における政府への反乱が、戦前からの日本勢力と戦後の中国化勢力の闘い（又は「日中戦争後の混乱」）の象徴となったからである。

二・二八事件が起きた際、旧日本軍に属していた元兵士や、「皇民化世代」と呼ばれた台湾の若者達が「自発的な再動員」で反乱に加わった。皇民化動員の記憶が呼び覚まされたと言える。事件後、彼らの一部がその戦闘経験を買われて国軍に加わり、約15,000人の台湾人が国軍の一員として中国大陸での戦いに参加した。

二・二八事件後も台湾における日本の影響はなくならなかった。1949年になり、中国大陸における国民党政権の敗戦が色濃くなった頃、台湾の防衛と中国大陸の奪還に向け、蒋介石や国民党政権が軍隊を立て直しに取り組んだ際、徴兵制や動員指針の再構築を支援するため、白団が台湾に到着した。白団とは、旧日本軍将校から成る秘密の軍事顧問団であり、東アジアにおける冷戦の構図の中で、1949年から1969年にかけて国軍に日本式の戦争動員体制を導入した。つまり、国民党政権は白団の助けを借り、日本のシステムを継承することで、台湾国民に対して日本の戦争動員体制を継続したのである。連合国との全面戦争の代わりに、この時期の東アジアにおける台湾は、反共産主義勢力にとって最後の砦だったのである。

この研究は、日本帝国瓦解後の歴史、戦後の東アジアにおけるその「継続性や遺産」に対する理解、また中華民国にとって「敗北」が意味するものをより深く理解するのに役立つ。第2次世界大戦の勝者でありながら、国共内戦の敗者となり、世界大戦中は敵国であった日本と非公式に手を結び、共通の敵である中国共産党への抵抗を継続した台湾の歴史は「敗北」そのものである。